

# 総合的な表現を生み出す音楽科の授業の創造

—第2学年「ありがとう」～みんなの思いを音楽にのせて～の実践—

福田 秀 範

## 1 音楽表現で大切なことは

音楽表現は、歌を歌う、楽器の演奏をする、といった目に見える形で展開される。それで、声が出ていたり、音が鳴っていれば、表現できた子どもたちが満足してしまうことはないだろうか。音楽表現といえる最も大切なことは、子どもたちが発した音や声が、自分の感情やイメージといった目に見えない自分の内面とつながっていることと考える。内面は、その子どもを取り巻く回りの人やものとのかかわりにより、どんどん豊かになっていく。その際、特によい刺激となるのは、本校でも大切にしている直接体験である。この直接体験を通して育まれた目に見えない子どもの内面を、目に見えるようにするのが表現であると考え。音楽科では、この子どもの内面を、音や音楽を媒体にして表現できる力を身につけていきたい。さらには、音楽表現を出発点として、他の複数の表現媒体と結びつくことで、総合的な表現を生み出していくような題材を追究していきたい。

## 2 総合的な表現を生み出す音楽科の授業の創造

子どもの内面が、目に見えるような総合的な表現へと発展していくための授業づくりを行うために、次の4つの場を設定して、成果と課題を探っていくことにする。

- ①子どもの内面に直接働きかける体験や学習の場の設定〈直接体験～課題設定〉
- ②自分の思いを伝えるための表現方法（媒体）を自分で決める場の設定〈計画〉
- ③表現を見合い、人とかかわりながら表現を高める場の設定〈表現〉
- ④表現したことを、ふりかえる場の設定〈ふりかえり～新たな課題設定〉

## 3 実践の概要 「ありがとう」～みんなの思いを音楽にのせて～（第2学年） 〈音楽科と国語科・生活科との関連を図った実践〉

### (1) 題材について

人は、自分のこれまでの成長を振り返ったとき、親はもちろんのこと、自分を取り巻くたくさんの人々の愛情に支えられてきたことに気づくであろう。そのことに対し「ありがとう」という言葉をいざ伝えようとなると、照れくささが先に出て、言葉にしにくいものであろう。本題材は、この「ありがとう」というみんなの思いを音楽で表現することで、お世話になった人々に伝えることをねらいとしている。ここでは、国語科「おへそって、なあに」で学んだことや、生活科「ぼくのいのち、わたしのいのち」で学習したことを生かして、お世話になった人たち全員に「ありがとう」という気持ちを伝えたいという意欲につながるようにしていきたい。

本学級の児童は、1年生の時に、身の回りの音を自分たちで工夫して、身近な音素材で表現する経験をしている。その音づくりでは、実際に自分が聞いた具体的な音が出発点となり、子どもたちがイメージをふくらませていった。今回は「ありがとう」という抽象的な言葉が音楽表現の出発点となる。「ありがとう」の言葉に込めたい自分なりの思いをしっかりと出し合い、どんなときのどんなことについての「ありがとう」なのかを具体的に表現につなげていきたい。その過程で、一人一人の個性的な表現を引き出すとともに、みんなで表現をつくり上げる成就感・達成感を味わえるようにしたい。

## (2) 指導目標

- 1 自分の成長を支えてくれた身近な人への感謝の気持ちを、自分の考えた言葉をもとに音楽表現することができるようにする。
- 2 自分の思いを伝えるために必要な音楽表現を工夫することができるようにする。

## (3) 指導内容と計画……………10時間（+国語科8時間+生活科8時間）

- 第一次 「ありがとう」って伝えたいな……………1時間  
第二次 どんなときの「ありがとう」を表現しようかな……………1時間  
第三次 どうやって「ありがとう」を伝えようかな……………6時間  
第四次 「ありがとう」～みんなの思いを音楽にのせて～……………2時間

## (4) 学習活動の実際

### 【第一次 「ありがとう」って伝えたいな】→〈①直接体験～課題設定〉

ここではまず、生活科「ぼくのいのち、わたしのいのち」や国語科「おへそってなあに」で学習したことをふり返る場を設定した。自分のいのちがお父さんとお母さんのいのちのもと（精子・卵子）から出発し、お母さんのおなかの中で、くだを通して空気や栄養を受け取ったり、いらなくなったものを受け渡ししながら成長し、生まれて今日まで大きくなったこと。その過程で、お母さんだけでなく、たくさんの家族や身の回りの人が、自分の成長にかかわり、愛情を注いでくれたこと。これらのことを、家族に実際にインタビューしたり、リュックに3000gの砂を入れておなかに抱え、自分がおなかにいた頃のお母さんの気持ちを擬似体験したりすることを通して、自分なりの感想もっている。（右下参照）

この学習後、これらの感想を実際に家族の人に伝えた子どもは、どのくらいいるか聞いてみた。内面では思いがもてても、それを外へ発するとなるとなかなか照れくさいという実態はここから把握できた。参観日を生かし、みんなでこの「ありがとう」という気持ちを直接伝えることはできないだろうか。ここから、この学習課題が子どもたちのものとなり本格的な活動が始まった。

- わたしのいのちを生んでくれてありがとうございます。そのおかげでこんなに大きくなりました。
- お母さんはからだ小さいので、うごくのが大へんだったそうです。お母さんに「ありがとう」と言いたいです。
- おじいちゃん、おばあちゃんがいなかったら、今に自分はいなかったんだ。わたしにいのちのバトンをわたしてくれて、ありがとうございます。
- ぼくがおなかにいたとき、お母さんが絵本を読んでくれたり、お父さんが音楽をきかせてくれました。ぼくはしあわせです。
- 生まれてすぐに泣かなくて、びょういんの先生におしりをたたかれてやっと泣いたそうです。助けてくれてありがとうございます。

### 【第二次 どんなときの「ありがとう」を表現しようかな】→〈②全体の計画〉

「ありがとう」といっても、いつの、どんなことへのお礼の気持ちなのかが具体的にしなければ、ただ漠然としたものになるので、教師側から次のような提案をした。「自分が生まれてから今日までの成長で、自分が一番してもらってありがたかったと思うのは、どんなこと。」

すると、「ぼくがおなかにいるとき。それは、お母さんがぼくのためにきらいなものまでがんばって食べてくれたから。」「私は生まれてすぐのとき。～その緒が首に巻き付いていたのを病院の先生が助けてくれたから。」「保育園のとき。小学校に入学する前に、たくさんのことを教えてくれたから。」と様々な答えが返ってきた。そこで、「ありがとう」を伝える場面を「おなかの中にいたころ」「生まれた時」「生まれてから現在まで」という時間で区切り、自分が一番思いを伝えられる場面を自己決定して、これからの表現活動に取り組んでいくことになった。

### 【第三次 どうやって「ありがとう」を伝えようかな】→〈②グループ計画～③表現〉

ここから、3つのグループ活動が始まった。グループ名もそれぞれの場面毎で「お母さんのおなかの中で」「生まれたぞ」「こんなに大きくなったよ」と決まった。

「お母さんのおなかの中で」グループは、おなかの中で大きく育ててくれたお母さんへの「ありがとう」を中心に表現をつくり始めた。話し合いが進むにつれ、自分が生まれたのは、何億とも言われる精子たちがいてくれたおかげだ、精子と卵子がお母さんのおなかの中で無事に着床してくれたおかげで、今の自分があるんだというところまで気持ちが広がっていった。そこで、このグループは、精子と卵子が受精し、子宮に着床し、へその緒を通して大きくなっていった自分のいのちの誕生までの過程を表現しようと決めた。そこで、子どもたちが選んだ表現方法は身体表現で、自分が精子や卵子になりきることで、その思いを伝えたいと考えたのである。しかし、ただ身体を動かしているだけでは、見る人に何の様子か伝わらなかったようで、ナレーターの子どもが出現した。表現していることは伝わるようになったが、何か足りない。例えば、精子と卵子が出会い、受精したその瞬間が身体の動きだけでは盛り上がらない。ましてや自分のいのちが誕生した瞬間である。お家の人もとても喜んだこの場面をどうすれば表現できるだろうか。子どもたちは、音を加えてみることにした。また、自分がおなかの中にいたころのインタビューをして、お母さんから「おなかをけったりして痛かったよ。」という共通のエピソードも表現したいと考えた。このことは、「おなかの中でキック」という詩をつくり、一人の子どものアイデアで即興的な歌が出来上がったのである。こうして、どんどん表現が広がっていった。



「生まれたぞ」グループは、自分が生まれたときに、お母さんをはじめとするお家の人たちが実際に思ってくれたことへの感謝の気持ちを中心に表現をつくり始めた。

お母さんが産気づき、病院で出産を終えるまでの様子を、外で待つ家族の思いを盛り込みながら、劇で表現していった。そして、産まれてきた赤ちゃんの気持ちになってみんなが言葉を考え、一つの詩にまとめていった。その詩にはふしがつき「生まれたぞ」という歌になった。劇の最後にそれは歌われ、はじめは旋律だけだった伴奏も、ピアノの得意な一人の子どものアイデアで、両手の伴奏がつき、劇と歌という表現が完成していった。

「こんなに大きくなったよ」グループは、自分のこれまでの成長において、とても感謝している人に伝えたいことを朗読するという表現をつくり始めた。

お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、病院の先生や保育園、幼稚園の先生など、実際に目の前で思いを伝えられない人も含めて、一人一人が自分の思いを手紙に書いて朗読するという方法がまず考え出された。そして、みんなの共通の思い「ありがとう」を集めたとき、一つの詩が出来上がった。それにふしをつけて、この場面にも「みんなありがとう」という歌が完成した。この旋律はオルゴール調の音色で、一人一人の朗読の際に、BGMとしても使われることになった。こうして、朗読と歌とBGMという表現が完成した。



【第四次 「ありがとう」～みんなの思いを音楽にのせて～】→〈③表現～④ふりかえり〉

こうして、3つのグループがそれぞれ創作した表現をつなぎ合わせ、一つの表現として仕上げた。お互いがつくり上げてきた表現を見合いながら、見ていてわかりにくいところや思いがうまく伝わってこないところを本音で言い合いながら、ついに完成の日を迎え、実際に保護者の前で表現することとなった。次に示すのは、この表現の主な流れを抜き出したシナリオである。

「ありがとう」～みんなの思いを音楽にのせて～

第1場面 〈お母さんのおなかの中で〉

第2場面 〈生まれたぞ〉

登場人物	セリフ	音表現
3億の精子たち	「さあ、およぐぞ」 (卵子に向かって一斉に泳ぎ始める。)	精子の進む音 ・ティンパニー ・ペットボトル
精子	(次々と進む精子たち) 「卵子を見つけたぞ」 (難関を突破し、卵子までたどり着いた精子たち)	受精の瞬間の音 ・ツリーチャイム
精子と卵子 (受精卵)	「やったー。」 (受精、それはいのちのはじまり) (着床、赤ちゃんのはじまり) (お母さんと管でつながっている) (初めての心臓の鼓動)	着床の音 ・ツリーチャイム 初めての心臓の音 ・ジャムのふた
おなかの中の赤ちゃん	(おなかの中で動き回る赤ちゃん) 「えいっ、やあ。」	
お母さんの声	「あ、いたい。もう、この子ったら。」	
お父さんの声	「どれどれ・・・動かないなあ。」	

歌「おなかの中でキック」 作詞・作曲：おなかの中グループ  
おなかの中でキック、パンチ！ おなかの中でキック、パンチ！  
父さんさわると やらないよ  
おなかの中でキック、パンチ！ おなかの中でキック、パンチ！  
おなかの 中で キック

登場人物	セリフ	音表現
お母さん	「いたい、いたい。」	
病院の人	「もうすぐ。がんばってくださいね。」 (外の待合室で話している。)	
きょうだいたち	「男の子かな、女の子かな。」	
お母さん	「いたい、いたい。」	
病院の人	「頭が見えてきましたよ。もうすぐですよ。」	
赤ちゃん	「オギャー オギャー・・・」	ピアノ伴奏

歌「生まれたぞ」 作詞・作曲：「生まれたぞ」グループ  
オギャー オギャー 生まれたぞ お父さん お母さん よろしくね  
初めて会って うれしいよ これからもよろしくね  
おばあちゃん おじいちゃん ありがとう  
みんな みんな やさしく そだててくれてありがとう  
ほんとにありがとう

第3場面 〈こんなに大きくなったよ〉

登場人物	セリフ	音表現
自分がお世話になった人へのメッセージ	「お母さん、私がおなかのいたとき、嫌いなものをたくさん食べて私に栄養をおくってくれてありがとう。」 「保育園の先生、6年間わたしにいろいろなことを教えてくれてありがとうございました。」 「お父さん、ぼくが熟を出したとき、車を飛ばして病院に連れて行って来てありがとう。」 「病院の先生、私が生まれてすぐに泣かなかったとき、おしりをたたいて泣かせてくれてありがとう。」 「去年、交通事故にあったとき、心配してくれてありがとう。おかげで、こんなに元気になりました。」 ：	BGM 「みんなありがとう」 ・シンセサイザー音色 (グロッケン)

歌「みんなありがとう」 作詞・作曲：「こんなに大きくなったよ」グループ  
お父さん お母さん おじいちゃん おばあちゃん  
わたしたち ぼくたちを 大切に そだててくれて ありがとう  
こんなに大きくなりました

代表あいさつ	「お世話になったみなさん 本当 に ありがとう ございました。」
--------	----------------------------------



左上 右上 左中 第1場面 右中 第2場面  
左下 右下 第3場面

第1場面の精子の進む音は、ティンパニーを静かに響かせることで表現していた。精子と卵子が出会うところは、ツリーチャイムを取り入れた。初めての心臓の音は、イチゴジャムのふたの中心をポコポコ親指で押さえることで表現したユニークなものだった。第2場面は、劇表現が中心だったが、歌の伴奏を工夫したりしながら、歌を通して、生まれてきた喜びを表現していた。第3場面は、BGMのオルゴール調の音色が朗読とともに合っていて、聞いている人が思わず涙ぐんでしまうような表現に仕上がった。最後の歌をみんなでもう一度歌うという演出は、最後がしまり、より感動的な表現となった。このことは、右にある表現を見た保護者の感想にも表れている。

○自分のいのちが誕生するまでを、男女ともに明るく、大変素直に表現しているのを見て、ほほえましく思い、今の時期だからこそ生命誕生のすばらしさを素直に吸収して感動しました。  
○みんなが照れくさそうにしている、目が輝いて、「ありがとう」と気持ちを伝えてくれたときは、胸が熱くなりました。  
○自分一人で大きくなったわけではない、自分一人で生きているわけではない、子どもたちが素直に感謝の言葉を言えるのは、これまでの学習の成果だと思いました。

## 4 成果と課題

2に示した4つの場の設定と本実践を照らし合わせて、その成果と課題について見ていくことにする。

### ① 子どもの内面に直接働きかける体験や学習の場の設定について

本実践に取り組む以前に、子どもたちは生活科の学習で、自分のいのちがお母さんのおなかの中に誕生してから、生まれて大きく育つまでに、お家の人たちがどのような思いで育ててくれたのかを、ていねいに聞き取る活動を行っていた。その過程で、どの子どもも自分のことを愛情たっぷりに大切に育ててくれたんだということを感じとっていた。小さいころの写真を取り出し、その当時の思い出話をたっぷり話す時間がもて、最近会話が少なかったという親子が温かい気持ちになれたという感想や、小さいころの話を、子どもが目を潤ませながらうれしそうに聞いてくれたという感想も聞くことができた。これらの愛情を直接受け止めた子どもたちだったので、「ありがとう」の気持ちを伝えようという学習課題はすんなりと自分の課題になっていったと思われる。

### ② 自分の思いを伝えるための表現方法（媒体）を自分で決める場の設定について

本実践では、様々な表現方法が見られた。教師の意図は、子どもたちから出た様々な「ありがとう」の言葉を集めて詩をつくり、それを歌にして表現するという題材設定をしていたが、劇や語りや身体表現など、歌以外の表現形態が子どものアイディアで登場し、様々な音素材による音表現や自分たちでつくったふしを生かしたBGMといった表現が結びつき、総合的な表現へと広がっていった。この場が、歌と表現を限定するのではなく、自分の伝えたい思いを明確にし、どうやったらそれが伝わるかを具体的に話し合い、自分にあった表現方法を自由に決められる場にしたことが、このような総合的な表現を、結果として生み出したと思われる。

### ③ 表現を見合い、人とかがわりながら表現を高める場の設定について

自分たちがつくった表現は、自分たちがこれでできたと感じて、どの程度自分たちの思いが相手に伝わるかどうかまでは判断しにくい。ここに、人とかがわりながら表現を高め合う必要性があると考えられる。本実践では、3つのグループがお互いの表現を見合う場を何度も設定し、お互いによさや改善したらよいところを発表し合った。一つのグループがテーマソングをつくれれば、よし自分たちも、という発想も、子どもたち自身の手で3つの歌が誕生するきっかけになった。第1場面の身体表現にはナレーターをつけた方がいいという発想も、第2場面の劇のせりふの工夫も、第3場面の最後の歌はみんなでもう一度という発想も、お互いに見合う中で出てきた全体の工夫であった。

### ④ 表現したことを、ふりかえる場の設定について

今回の表現は、参観日を利用して、実際に自分の親を目の前にして発表を行った。子どもたちが自分の成長を振り返り、これまでにお世話になったたくさんの人たちへの感謝の気持ちを音楽で表現しようとした試みだったが、保護者からたくさんの感想が寄せられた。子どもたちに読んで聞かせると、自分たちの伝えたい気持ちがうまく表現できたことに対し、最高の喜びを味わうことができたようである。自分の思いを、どんな方法であれ、伝えきる喜びや感動を子どもたちが感じることができたのが本実践の大きな成果であったといえる。

本実践は、子どもの内面が「ありがとう」という抽象的な言葉の中にも、自分なりの具体的な経験から、感情、イメージが一人一人明確になっていた。どの子どもも自分の表現に見通しをもって取り組む姿勢が見られた。今後も、この内面が自分なりに具体化できる題材を追究していきたい。その内面を育てている他教科との関連は、今後ますます大切になっていくであろうと私は考えている。